

博士学位論文(要旨)

地域で生活する高齢者の  
スピリチュアリティに関する研究

指導 新野直明 教授

国際学研究科  
老年学専攻  
20642603  
三澤久恵

## 目次

序論	1
第 章 現在のスピリチュアリティ研究をめぐる到達点と課題	3
第 1 節 スピリチュアリティ研究の動向：第 1 期	3
第 2 節 スピリチュアリティ研究の動向：第 2 期	4
第 3 節 スピリチュアリティ研究の動向：第 3 期	7
第 4 節 既存のスピリチュアリティ尺度の検討	15
第 5 節 スピリチュアリティをめぐる隣接領域	18
第 6 節 スピリチュアリティ研究の到達点と課題	19
第 章 本研究の目的	21
第 1 節 本研究の目的と意義	21
第 2 節 研究の基本となる概念	21
第 章 高齢者のスピリチュアリティ概念の質的検討	22
第 1 節 研究目的	22
第 2 節 研究方法	22
第 3 節 研究結果	24
第 4 節 考察	26
第 5 節 結論	29
第 章 高齢者のスピリチュアリティ概念の量的検討	31
第 1 節 研究目的	31
第 2 節 概念モデルと質問項目の作成	31
第 3 節 尺度作成の予備的調査 - 質問項目の選定	37
第 4 節 評定尺度作成調査と妥当性と信頼性の検討	40
1．研究対象	40
2．研究方法	40
3．研究結果	42
4．妥当性と信頼性の検討	51
第 5 節 考察	58
第 6 節 結論	60
第 章 総合的考察	61
1．高齢者スピリチュアリティ評定尺度の検討の意義	61
2．スピリチュアリティと QOL を中心とした考察	62
3．高齢者のスピリチュアルケア	63
4．研究の今後の展開	63
謝辞	64
文献	65
資料 1 評定尺度作成アンケート調査票	72
資料 2 高齢者のスピリチュアリティ評定尺度	78

## 論文要旨

極めて急速に高齢化が進展している中で、高齢者の保健医療福祉サービスを考える時に、高齢者の健康づくりは身体的な疾患や身体諸機能の低下をできるだけ防ぐことのみならず、社会的、心理的、スピリチュアルな側面からの総合アプローチが有用であり、スピリチュアリティは Successful aging な生活をする高齢者の比率を高めることができるといわれている。日本ではスピリチュアリティの概念が不明瞭のまま使われており、高齢者を対象としたスピリチュアリティに関する研究も少ないのが現状である。

1. 第 1 章「現在のスピリチュアリティ研究をめぐる到達点と課題」は、スピリチュアリティの概念の変遷と多様性について整理した。研究の内容を日本と海外に分けて、さらに、WHO (World Health Organization) を海外から独立させて検討した。そのまとめは以下のとおりである。

### スピリチュアリティと QOL の関係

スピリチュアリティはホスピス活動の中で誕生した QOL の概念の発展の中で発展してきた。第 1 期の 1980 年頃までは QOL は疼痛緩和などの身体症状を主とする身体領域が構成概念であった。第 2 期は QOL の構成概念は修正され、身体機能、心理的安定、社会関係を含む領域が QOL の構成概念とされるようになった。第 3 期の 1995 年以降になってスピリチュアリティや人間存在の領域が QOL の第 4 領域として加えられる動きが出てきた。

### スピリチュアリティの概念と構造

緩和ケア等における事例的研究が多くみられ、概念が曖昧のまま研究がなされている場合が多い。今後の研究では概念とその構造を明らかにすることが必要とされる。

スピリチュアリティ研究の到達点を次のようにまとめた。

A.人間の全体論 (holistic) 的な理解が前提。B.人間の生き方の根元に関わり、人の内面的な本質に関連する。C.潜在的にすべての人々に存在し、危機に直面したときに顕在化する。D.自己と他者、自然、超越者との相互を結ぶものである。E.スピリチュアリティは宗教性を包含するが宗教性より広い概念である。

スピリチュアリティは個人の文化的・歴史的・宗教的影響を強く受ける。

スピリチュアリティの訳語の課題がある。

スピリチュアリティ研究の対象の課題として、健康人のスピリチュアリティの研究は少なく、高齢者を対象としたスピリチュアリティの概念研究は始まったばかりである。

2. 第 2 章「本研究の目的」は研究目的を述べ、本研究の果たす役割を展望した。また前章の先行研究による高齢者のスピリチュアリティ概念の検討を行い、研究の基本となる概念を定めた。その内容は以下のとおりである。

### 本研究の目的

本研究は日本の高齢者のスピリチュアリティの概念と構造を明らかにし、スピリチュアリティの評定尺度の作成を試みる。そのために、地域で生活する高齢者を研究対象として、1)スピリチュアリティの構成概念を質的研究により明らかにし、その結果に基づき、2)高齢

者のスピリチュアリティの評定方法を量的研究により検討することである。

### **本研究の意義**

抽象的なスピリチュアリティを広範囲に捉えて評定できるツールを作成することは困難であるが、スピリチュアリティの概念を明らかにして、量的に把握し、統計的処理を行うことにより、実際の活用を図ることは可能であろうと考える。高齢者のスピリチュアルな側面に対してケアする時に、ツールを用いてケアを展開でき、実践の評価も可能になれば、新たな展開が期待できるであろう。高齢者のスピリチュアリティのセルフケア支援プログラムの開発と評価も将来可能になると考えられる。

### **研究の基本となる概念**

前章の先行研究による高齢者のスピリチュアリティ概念の検討から、高齢者がスピリチュアリティを表出するであろう関心の方向性に焦点をあて、Reed の主張する3方向に着目した。これらの概念が日本の高齢者からも抽出されるかを検証した。

**3. 第 3 章「高齢者のスピリチュアリティ概念の質的検討」**は高齢者の生きることに焦点を当て、スピリチュアリティに関する概念の構成要素とその構造を明らかにすることを主目的として、調査研究を行い検討した。その内容は以下のとおりである。

### **研究目的**

Fowler らはスピリチュアリティはその人にとっての究極的な意味や信念、価値を持って生きる生き方であるとする。そこで高齢者は生きることをどのように考えているかを調べて、その結果から高齢者のスピリチュアリティの概念について明らかにした。

### **研究方法**

木下が提唱する修正版グランデッド・セオリー・アプローチ、M-GTA の手順に準じて質的研究による概念生成を行った。K 大学の倫理委員会承諾後、研究目的と趣旨、プライバシー保護などを対象者に口頭と書面で説明し、承諾を得た。地域で生活する高齢者を調査対象者として、都内 A 区及び B 区の老人福祉センターを利用する 16 名に調査を行った。男性 6 名、女性 10 名である。年齢は 74 歳から 95 歳で平均年齢は 82.3 歳であった。

### **研究結果**

分析テーマに基づき、最終的に 23 の概念を生成した。

コア概念は「生かされて生きている自分の存在の確認」とした。コア概念を構成する「乗り越えてきた道のり」「人との絆」「目に見えない力」「生きている限り」「自分の心に向かう」の 5 コアカテゴリーが生成された。

### **考察**

生成された構成概念を既存のスピリチュアリティ概念と比較検討することで、本研究の構成概念の特徴を明らかにした。生成された概念は危機的状况に直面して、乗り越えてきた道のりの再確認と、自分の置かれた状況を確認し適応しつつ毎日の生活を継続して、自分自身のこれからの人生の受容と死へのへの考えを発展させる内容を持つ。地域で生活する高齢者の生きる意味の概念は、高齢者のスピリチュアリティ概念に近づくことできたと解釈できた。

### **結論**

高齢者の生きる意味の探求はその人が探求する自己の力を超えるもの、自己の心に向かうもの、他者との関係の 3 方向が示された。高齢者は日々の生活の中で、統合を図ろうと自分

らしく懸命に生きている存在であり、スピリチュアリティはその人の存在を支え、方向性を示す。Reed のいう 3 方向の概念が確認された。さらに Reed の概念には網羅されていない時間的経過の概念が存在することが明確になった。

**4 . 第 4 章「高齢者スピリチュアリティ概念の量的検討」**は高齢者のスピリチュアリティを把握する評定尺度を検討した。その内容は以下のとおりである。

#### 研究目的

地域で生活する高齢者のスピリチュアリティ概念として生成された 5 つの概念と既存のスピリチュアリティ尺度の検討を踏まえて、下位概念を位置づけ、スピリチュアリティの評定法の一つである評定尺度の作成を検討した。

#### 研究方法

「日本の既存のスピリチュアリティ尺度を用いた事前調査」を行い、新たな評定尺度の検討の必要性を確認した。

構成概念は質的研究の結果から Reed のスピリチュアリティを表出する 3 方向の概念に時間軸を追加した高齢者スピリチュアリティ 3 次元 5 方向モデルを構築した。

尺度質問項目原案作成はインタビューによる高齢者の「生きる意味の探求」で、語られたキーワードを中心に先行研究からキーワードを追加した。

K 大学の倫理委員会の承諾を得て、対象の倫理的配慮を充分行った。

「スピリチュアリティに関する質問項目の選定」では、都内 C 区の老人福祉センターのイベントに参加した高齢者 64 人にアンケート調査を行い、項目選定して 29 項目による暫定尺度とした。

「評定尺度作成調査と信頼性と妥当性の検討」では都内 A 区の老人福祉センター利用者 310 人にアンケート調査を実施した。29 の質問項目の回答は 5 件法とした。

統計解析では高齢者スピリチュアリティ尺度 (16 項目) の因子モデルとして、第 1 次因子を「乗り越えてきた道のり」「人との絆」「自分を超越する力」「自分の心に向かう」「生きている限り」の 5 因子、第 2 次因子を「スピリチュアリティ」とした 5 因子 2 次因子モデルを仮定し、そのモデルのデータへの適合度を確認的因子分析により検討した。

スピリチュアリティ尺度と多少とも類似する 3 つの尺度、「精神的自立性尺度」「短縮版 GDS」「生活満足度尺度 K」との関連の検討を行った。

尺度の信頼性については Cronbach の 係数により内的整合性を検討した。

#### 研究結果

##### 基本属性

対象者の性別は男性 76 名 (24.5 %)、女性 231 名 (74.5 %) であった。年齢は 65 歳から 98 歳の範囲で平均 77.8 歳 (標準偏差 4.1) であった。家族構成は独居 128 名 (41.3 %)、夫婦のみ 88 名 (28.4 %)、本人 (夫婦) と単身の子ども 43 名 (13.9 %)、本人 (夫婦) と子供世帯 29 名 (9.4 %) であった。主観的健康感については「非常に健康」と「どちらかという健康」をあわせると、75.2 % の者が自分の健康状態を健康と認識している。老研式活動能力指標の結果は 平均値 11.79 ( $\pm 1.8$ ) で、範囲 2 ~ 13 点に分布していた。

確認的因子分析の結果、「生きてきた道のり」「人との絆」「自分を超越する力」「心に向かう」「生きている限り」の 5 つの下位概念を第 1 次因子、「スピリチュアリティ」を第 2 次因子と

する 16 項目からなる 5 因子 2 次因子モデルが構築された。(  $\chi^2 / df = 2.471$ 、CFI = 0.951、RMSEA = 0.061、) 尺度の構成概念妥当性は支持された。また尺度の信頼性については Cronbach の 係数により尺度全体では 0.91、下位尺度では 0.67 ~ 0.83 で、内的整合性は確保されていた。十分な信頼性を持つ尺度が得られた。

16 項目を高年齢者スピリチュアリティ評価尺度 (Spirituality Scale for the Elderly - SSE) とした。

構成概念妥当性の検討は以下のとおりである。

#### 第 1 因子「乗り越えてきた道のり」

高齢者は多くの出来事、人生の節目を乗り越えて来たことの意味づけをしながら生きていることがわかる。現在の高齢者は戦争、敗戦、そして経済の発展、価値観の変化など未曾有の体験をした。人生を振り返り、それを他者に語ることは過去を想起することだけではなく、過去を評価する過程であり、意味を生成する過程である。構成概念として妥当な概念であるといえる。

#### 第 2 因子「人との絆」

家族や友人、社会との調和、愛し愛されたい、ゆるしゆるされたいというニーズが存在する。人生のあらゆる場面で「人の絆」の必要性に遭遇する。高齢者は人生の節目で出会った他者の存在を確認しながら自己の存在確認をしている。家族を含めて今まで出会った多くの他者、またはこれから出会う他者を含む概念を測定する尺度であり、構成概念として妥当であるといえる。

#### 第 3 因子「目に見えない力」

日本人は特定の宗教を持つものは少ないが、盆や正月などには神棚を拝んだりする宗教のあり方を持つことから、日常生活に溶け込んだ神や子孫との結びつき、大自然を含んだ自分を超越する大きな力を認識することを測定する尺度は構成概念として妥当であるといえる。

#### 第 4 因子「自分の心に向かう」

スピリチュアリティは個人の内面的な営みであり、自らの内面と向き合って、自分なりの道を歩いて行き、この因子の対極には自己を超える力が存在する。自己への関心の極であり、自己の人生の受容であると考えられる。構成概念として妥当であるといえる。

#### 第 5 因子「生きている限り」

価値の継続、死への受容、死への準備の内容を持つ。第 1 因子の延長線上にこれからの人生への展望がある。生きてきた歴史のバランスが保たれていることにより、自己実現や自らの死を受容し、人生をよかったと思うことが出来る。構成概念として妥当であるといえる。

本尺度と「精神的自立性尺度」J、「短縮版 GDS」J、「生活満足度尺度 K」の相関関係を検討したところ、相関は低く、スピリチュアリティ尺度の独自性が示唆された。

### 考察

項目精選の過程、構成概念妥当性の検討、信頼性の検討、他の尺度との関連について考察した。

### 結論

共分散構造分析を用いて概念の適合度を確認し、「スピリチュアリティ」という 2 次潜在変数と「乗り越えてきた道のり」「人との絆」「自分を超越する力」「自分の心に向かう」「生きている限り」の 5 つの 1 次潜在変数から構成される統計学的に許容水準を満たす 5 因子 2 次因

子モデルが確認された。構成概念妥当性と信頼性を有していることが確認された。  
他の尺度との関連の検討では、スピリチュアリティ概念の独自性が示唆された。

5. 第 5 章「統合的考察」は高齢者のスピリチュアリティの研究の質的・量的検討を通して、全体的な考察を行った。その内容は次のとおりである。

#### 高齢者スピリチュアリティ評価尺度の検討の意義

スピリチュアリティのような比較的新しい分野で、概念が一定でない事柄の場合、庶民レベルからの素人理論の積み上げは上からの理論との弁証法的な関わりにより、幅広い共通した理解が得られると考えられる。スピリチュアリティ概念生成の質的研究のインタビュー内容を基に、先行研究を確認しながら検討した評価尺度は日本人の高齢者の実態を反映したものとなったといえよう。「乗り越えてきた道のり」「人との絆」「目に見えない力」「自分の心に向かう」「生きてる限り」の5因子から成り立ち、スピリチュアリティを5因子総得点で求めることが可能である。質問項目は5因子16項目で簡便に評価できるので地域で生活する高齢者に実際に用いて、その実用性の検証が必要となろう。

Crowther らの提言する高齢者の信念と価値、コミュニティ、successful aging に焦点合わせた日本の実情にあったスピリチュアルケアが必要とされる。スピリチュアルケアはケア提供者とケアを受ける者と双方向のヒューマンケアの関係が成り立ち、アンケートによる量的な把握と同時にアンケート時の高齢者の表情や態度等を把握することが可能であれば、その人の持つスピリチュアリティの有り様により近づくことができるのではないかと考える。ただ単に尺度の値の高・低の判定ではなく、なぜその値がでたのか、高齢者の関心の有り様はどこにあるのかなどを考察することが同時に求められる。さらにケア提供者はスピリチュアルニーズに呼応するためには豊かな感受性が求められ、自分自身のスピリチュアリティを見めることも必要になると考えられる。

#### スピリチュアリティと QOL を中心とした考察

本研究のスピリチュアリティ概念と QOL 尺度の下位概念を検討することで、QOL との関連を考える手がかりとした。George の主観的幸福感の概念整理に基づき検討した。QOL の概念に重なる部分もあるが、「自己に向かう」概念と「目に見えない力」概念は QOL の概念とは別に存在するのではないと考察でき、QOL 尺度と同じものではなさそうに思われた。

#### 高齢者のスピリチュアルケア

生きることの本質から発せられるスピリチュアルペインを他者がケアすることは難しいが、スピリチュアリティを「支える」ことが必要となろう。スピリチュアルな実践は人の認知に影響を与え、その後の健康の実践と結果に影響を与えることを考えると、高齢者保健医療動向の中で、セルフケアの視点が重要になると考えられる。高齢者の自主性を尊重したスピリチュアルケアのための地域の中の連携システムがあげられる。

#### 研究の今後の展開

1. ケアの中で尺度を利用する実践的研究の累積
2. 高齢者と家族またはケア提供者の対の研究を含んだ調査
3. スピリチュアリティの日本語表記の検討

## 文 献

- 1) 柴田博：老化の基本. 老人保健活動の展開 (柴田博編集), 医学書院, p 2-43, 1992.
- 2) 新野直明：老化の概念と学説. 老年学テキスト(柴田博, 長田久雄, 杉澤秀博編), 建帛社, p 33-37, 2007.
- 3) Rowe J W, Kahn R L : Human aging: usual and successful. Science. New series, 237, p 143-149, 1987.
- 4) 厚生統計協会：人口静態,2008 年版国民衛生の動向,厚生指標臨時増刊号, 55(9), p 37-42, 2008.
- 5) 内閣府：高齢社会白書(平成 20 年版). ぎょうせい, 2008 .
- 6) 社会保障入門編集委員会：2008 社会保障入門. 中央法規出版, 2008.
- 7) 辻一郎：健康寿命. 麦秋社, 1998.
- 8) 厚生労働省 / 編：主な厚生労働行政の動き,平成 19 年版厚生労働白書, p 164-194, 2007.
- 9) 厚生統計協会：保健対策. 2008 国民衛生の動向, 厚生指標臨時増刊号 55 ( 9 ) , p 95-122, 2008.
- 10) Stone HW ; 五島勝訳：危機におけるカウンセリング. 聖文舎, 1978.
- 11) Erikson E.H, Erikson JM, Kivnick HQ ; 朝長正徳,朝長梨枝子訳：老年期. みすず書房, 2002.
- 12) 柴田博：サクセスフル・エイジング.老年学テキスト(柴田博・長田久雄・杉澤秀博編), 建帛社, p 55-61, 2007.
- 13) Crowther MR, Perker MW, Achenbaum WA, et al : "Rowe and Kahn's model of successful aging revisited : positive spirituality - The forgotten factor". The Gerontologist / Gerontological Society, 42(5), p 613-620, 2002.
- 14) 鶴若麻理,安岡大仁：スピリチュアルケアに関する欧米文献の動向. 生命倫理, 11(1), p 96-96, 2001.
- 15) 窪寺俊之：スピリチュアルの黎明. 神学研究,関西学院大学神学部, 46 巻, P 65-83, 1999.
- 16) 安藤泰至：越境するスピリチュアリティ - 諸領域におけるその理解の開けへ向けて - . 宗教研究, 80(2), p 293-312, 2006.
- 17) 井出訓：高齢者の健康アセスメント. 老年看護学(中島紀恵子監修), 日本看護協会出版会, P 37-57, 2002.
- 18) 石井八重子,片岡智子：文献からみるスピリチュアリティへの関心の高まり. ホスピスケアと在宅ケア, 11(3), p 288-297, 2003.
- 19) 藤井美和：病む人のクオリティーオブライフとスピリチュアリティ. 関西学院大学社会学部紀要, 85, p 33-42, 2000.
- 20) Shirley Boulay ; 若林一美他訳：ホスピス運動の創始者 シシリー・ソングラス. 日本看護協会出版会, 1989.
- 21) Saunders C : Spiritual Pain. Journal of aliative Care, 4(3), p 29-32, 1988.
- 22) 鶴若麻里,岡安仁：高齢者の生きがいに関する研究 - Spiritual Well-being の視点から - . 臨床死生学, 7, p 47-52, 2002.

- 23) 田崎美弥子,松田正己,中根允文：スピリチュアリティに関する質的研究の試み - 健康および QOL の概念のからみの中で - . 日本醫事新報, 4036, p 24-32, 2001.
- 24) 鈴木大拙：日本的靈性. 岩波書店, 1972.
- 25) 柏木哲夫：臨死患者ケアの理論と実際 - 死にゆく患者の看護. 日総研出版, p 142-143, 1980.
- 26) 津田重城：WHO 憲章における健康の定義改正の試み - 「スピリチュアル」の側面について - . ターミナルケア, 10(2), p 90-93, 2000.
- 27) 窪寺俊之：スピリチュアルケア学概説. 三輪書店, p 27-38, 2008.
- 28) WHO：Cancer Pain Relief and Palliative Care EHO Technical Report Series NO.804, 1990. 武田文和訳；がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア,(第4版), 金原出版 , p 48-49, 1993 .
- 29) 池上直己,福原俊行他：臨床のための QOL 評価ハンドブック. 医学書院, p 34-44, 2001.
- 30) Ellison.CW：Spiritual Well-being: Conceptualization and Measurement. Journal of Psychology and Theology, 11(4), p 330-338, 1983.
- 31) Reed P.G：Spirituality and well-being in terminally ill hospitalized adults. Reserch in nursing and health,10(5), p 335-344, 1987.
- 32) Reed,P.G：An emerging paradigm for tha inbestigation of spirituality in nuasing. Research in Nursing and Health, 15, p 349-357, 1992.
- 33) Nagai-Jacobson,M.G.& Burkhardt,M.A：Spirituality: Cornerstone of holistic nursing prastice. Holistic nursing practice, 3(3), p 18-26, 1989.
- 34) Farran.C.J, Fitchett.G, et al：Development of a Model for Spiritual Assessment and Intervention. Journal of Religion and Health, 28(3), p 185-194, 1989.
- 35) Emblen & Julia.D：Religion and Spirituality Defined According to Current Use in Nursing Literature, Journal of Professional Nursing, 8(1), p 41-47, 1992.
- 36) Doka KJ：The Spiritual needs of the dying. Edited by kenneth J. Doka with D. Morgan, Death and spirituality , Baywood Publishing company, Inc. Amityville, New York, p143-150, 1993.
- 37) WHO.Amendments to the Constitution：Executive Board,101<sup>st</sup> Session；EB101/1998/Rec/2, p 40-43, 1998.
- 38) 臼田寛,玉城英彦河野公一：WHO の健康定義制定過程と健康概念の変遷について. 日本公衛誌, 第 10 号, p 884-889, 2004.
- 39) 山口昌哉：「靈性」ととりくみはじめた WHO. 仏教, 45 卷, p 190-198, 1998.
- 40) 中根允文,田崎美弥子：スピリチュアリティ. 日本医師会雑誌, 130(6), p 913-915, 2003.
- 41) 藤井美和,李政元,田崎美弥子他：日本人のスピリチュアリティの表すもの：WHOQOL のスピリチュアリティ予備調査から. 日社神医誌, 14, p 3-17, 2005.
- 42) The American Holistic Nurses' Association：AHNA Standards of Holistic Nursing Practice. AN ASPEN PUBLICATION, Marland, 2000.
- 43) キッペス・ウアルデマール；関谷英子訳：NHS におけるスピルチュアルケア.サンパウロ, 2003.
- 44) Stoter,D.J：Spiritual Aspects of Health Care. London, Mosby, 1995.
- 45) Walton.J：Spiritual Relationships; A Concept Analysis. Journal of holistic nursing, 14(3)

- p 237-247, 1996.
- 46) Erikson E. H /Erikson J. M. ; 村瀬孝雄・近藤邦夫訳：ライフサイクルその完結。みすず書房, 2001.
  - 47) Hermann CP : Spiritual needs of dying patients : a qualitative study. Oncol Nurs Forum, 28, p 67-72, 2001.
  - 48) 田村恵子：トータルペインって何だ？その3スピリチュアルな痛みを理解する。ターミナルケア, 6(6), p 469-474, 1996.
  - 49) 安藤満代：末期がん患者に対するライフレビュー・インタビューの試み。カウンセリング研究会, 37(3), p 221-231, 2004.
  - 50) 岩倉文代,平岡康子：スピリチュアルペインのある患者1事例の看護を振り返って。日本看護学会論文集, 成人看護学, 日本看護協会編集, 35, p 261-262, 2004.
  - 51) 神原雅美：事例からみるスピリチュアルケアの実際・4。臨床看護, 30(7), p 1106-1112, 2004.
  - 52) 本多昌子事例からみるスピリチュアルケアの実際・1。臨床看護, 30(7), p 1087-1092.
  - 53) 久保直子：Spiritual care に関する文献研究。死の臨床, 25(2), p 184, 2002.
  - 54) 藤井美和：病む人のクオリティーオブライフとスピリチュアリティ。関西学院大学社会学部紀要, 85, p 33-42, 2000.
  - 55) 青木信雄：高齢者を対象とした「たましいのケア」の枠組み。COMPREHENSIVE MEDICINE (全人的医療), 4(2), p 9-12, 2001.
  - 56) Hicks, T.J. Spirituality and the Elderly: Nursing Implications with Nursing Home Residents. Geriatric Nursing, 20(3), p 144-146, 1999.
  - 57) 新道悦子：看護婦が語るがん末期患者へのスピリチュアルケアの様相。日本がん看護学会誌, 15(2), p 82-91, 2001.
  - 58) 窪寺俊之：スピリチュアルペインを見分ける法。ターミナルケア, 6(3), p 192-198, 1996.
  - 59) 柴田博：クオリティ・オブ・ライフ (QOL) と生きがい。老いのこころを知る (柴田博, 長田久雄編), ぎょうせい, p 44-55, 2003.
  - 60) 野尻雅美：21世紀の健康増進 QOL Promotion. 公衆衛生, 69(10), p 815-819, 2005.
  - 61) Cohen, S.R., Mount, B.M. : Quality of life assessment in terminal illness: defining and measuring subjective well-being in the dying. Journal of palliative care, 8(3), p 40-45, 1992.
  - 62) 柏木哲夫：死にゆく患者と家族への援助。医学書院, 1986.
  - 63) Blazer, D. : Spirituality and aging well. Generation, 15(1), p 61-65, 1991.
  - 64) 窪寺俊之：死にゆく人々への宗教的援助。神学研究, 関西学院大学神学部, 41, p 105-129, 1994.
  - 65) 沼野尚美：スピリチュアルケアの意義。ターミナルケア, 6(3), p 199-204, 1996.
  - 66) Ross LA : Elderly patients perceptions of their spiritual needs and cure. Journal of advanced nursing, 26(4), p 710-715, 1997.
  - 67) 今村由香,河正子,萱間真美他：終末期がん患者のスピリチュアリティ概念構造の検討,ターミナルケア, 12(5), p 425-434, 2002.
  - 68) 高橋正実, 井出訓：スピリチュアリティの意味 - 若・中・高齢者の3世代比較による霊性・精神性についての分析 - . 老年社会科学, 26(3), p 296-306, 2004.

- 69) 小楠範子:スピリチュアリティの概念の検討. 臨床死生学, 9(1), p 1-8, 2004.
- 70) Gaskamp C, Sutter R, Meraviglia M, et al : Evidence based guideline ; Promoting Spirituality in the Older Adult. Journal of gerontological nursing, 32( 11), p 8-13, 2006.
- 71) Campbell, A : The sense of well-being in America: Recent patterns and trends. New York: McGraw-Hill, 1981.
- 72) Elkins D.N. et al : Toward a humanistic Phenomenological spirituality ; Definition description, and measurement. Journal of humanistic psychology, 28( 4), p 5-18, 1988.
- 73) Hungelmann, J., Kenkel-Rossi,E.,Klassen,L.,et al : Focus on Spiritual Well-Being: Harmonious Interconnectedness of Mind-Body-Spirit-Use of the JAREL Spiritual Well-Being Scale. Geriatric nursing, 17( 6), p 262-266, 1996.
- 74) Liu,Shwu-Juan : The construction and evaluation of the reliability and validity of a life attitude Scale for elderly chronic disease. Journal of Nursing Research, 9( 3), p 33-42, 2001.
- 75) Huang G.Y., & Chung, S.C. : Senior citizens' personal observations of health ; Life's changes and meanings and their relations to life's satisfaction and the anxieties of death. Ministry of national Science's Case Studies Achievement Report, 1986.
- 76) 中村雅彦 : 自己超越性と心理的幸福感に関する研究 - 自己超越傾向尺度作成の試み-. 愛媛大学教育学部紀要,第 1 部,教育科学, 45(1), p 59-79, 1998.
- 77) 比嘉勇人 : Spirituality 評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌, 22(3), p 29-38, 2002.
- 78) 野口海,大野達也,森田智視他 : がん患者に対する Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual(FACIT-Sp)日本語版の信頼性・妥当性の検討. 総合病院精神医学, 16(1) , p 42-48, 2004.
- 79) 藤井美和,李政元,田崎美弥子他 : 日本人のスピリチュアリティの表すもの : WHOQOL のスピリチュアリティ予備調査から. 日本社会精神医学会雑誌, 14(1), p 3-17, 2005.
- 80) 竹田恵子,太湯好子,桐野匡史他 : 高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発 - 妥当性と信頼性の検証 - . 日本保健科学学会誌, 10(2), p 63-71, 2007.
- 81) Harrison,J : Spirituality and nursing practice. Journal of Clinical nursing, 2, p211-217, 1993.
- 82) Heriot,C : Spirituality and aging. Holistic nursing practice, 7( 1), p 22-31, 1992.
- 83) 伊藤雅之 : グローバル文化とローカル性のあいだ. スピリチュアリティの社会学現代世界の宗教性の探求(伊藤雅之他編集), 世界思想社, p 80-108, 2004.
- 84) ハイデガー : 存在と時間(上). 桑木務訳,岩波書店, p 59-80, 2005.
- 85) 高橋照子 : 人間科学としての看護学 - パースイ理論の意味,ローズマリー・ロゾ・パースイ看護理論,(高橋照子監訳), 医学書院, p143-157, 2004.
- 86) Spilka,B.,Spangler,J.,and Nelson,C,B : Spiritual support in life Threatening illness. Journal of religion and health, 22(2), p 98-104, 1983.
- 87) 寺澤芳雄 : 英語語源辞典. 研究社,東京, 1997 .
- 88) キップス・ウアルデマール : スピリチュアルケア - 病む人とその家族・友人および医療スタッフのための心のケア. サンパウロ, p 8-26, 1999.
- 89) Fowler,M.,and Peterson,B.S: Spiritual themes in clinical pastoral education. Journal of Training and Supervision in Ministry, 18, p 46-54, 1997.

- 90) 木下康仁：グランデッド・セオリー・アプローチ - 質的実証研究の再生. 弘文堂, 1999 .
- 91) 木下康仁：グランデッド・セオリー・アプローチの実践 - 質的研究への誘い. 弘文堂, 2003.
- 92) 木下康仁：分野別実践編 グランデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂, 2005.
- 93) 木下康仁：ライブ講義 M-GTA - 実践的質的研究法 修正版グランデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂, 2007.
- 94) 青木信雄：前掲書 59)
- 95) Wink P, Dillon M : Spiritual development across the adult life course ; Findings from a longitudinal study. *Journal of Adult Development*, 9(1), p 79-94, 2002.
- 96) 岡本宣雄：高齢者のスピリチュアルな課題に関する研究 - 高齢者へのアンケート調査から - . *キリスト教社会福祉学研究*, p 37-47, 2003.
- 97) 竹田恵子, 太湯好子：日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討. *川崎医療福祉学会誌*, 16, p 53-66, 2006.
- 98) 西平直：スピリチュアリティとはどういうことか. *仏教*, 43, p 139-146, 1998.
- 99) 竹田恵子, 太湯好子, 桐野匡史他：高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発 - 妥当性と信頼性の検証 - . *日本保健科学学会誌*, 10(2), p 63-71, 2007.
- 100) 野口海, 大野達也, 森田智視他：がん患者に対する Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual (FACIT-Sp) 日本語版の信頼性・妥当性の検討. *総合病院精神医学*, 16 (1) , p 42-48, 2004.
- 101) Morgan J : Death and Bereavement, Spiritual, Ethical, and Pastoral Issues. *Death Studies*, 13, p 85-89, 1988.
- 102) 河正子：スピリチュアリティ、スピリチュアルペインの探求からスピリチュアルケアへ. *緩和ケア*, 15(5), p 368-374, 2005.
- 103) 黒川由紀子：高齢者の心のケア. *看護実践の科学*, 27(10), p 58-61, 2002.
- 104) Bianchi EC : Aging as a spiritual journey. *The Crossroad Publishing Company* , New York, 1997.
- 105) 菅原健介：心理尺度の作成方法 . *心理測定尺度集* , 堀洋道監修, p 397-408, サイエンス社, 2001.
- 106) 千代田区立高齢者センター：あゆみ - 開設 30 周年記念誌. 2005.
- 107) 藤田利治他：地域老人の日常生活動作の障害とその関連要因 . *日公衛誌*, 36(2), p 76-86, 1989.
- 108) 豊田秀樹編著：共分散構造分析 [ Amos 編 ] - 構造方程式モデリング. 東京書籍 , 2007.
- 109) 吉田富二雄：信頼性と妥当性 . *心理測定尺度集* , 堀洋道監修, p 436-453, 2001.
- 110) 鈴木征男, 崎原盛造：精神的自立性尺度の作成 - その構成概念の妥当性と信頼性の検討 - . *民族衛生*, 69(2), p 47-56 , 2003.
- 111) Yesavage JA, et al : The development and validation of Geriatric Depression Scale. *J Psychiatr Res*, 17, p 31-49, 1983.
- 112) Niini N, Imaizumi, Kawakami : A Japanese translation of the Geriatric Depression Scale. *Clinical gerontologist* , 10(3), p 85-87, 1991.
- 113) 矢富直美：日本老人における老人用うつスケール ( GDS ) 短縮版の因子構造と項目

- 特性の検討. 老年社会科学, 16(1), p 29-36, 1994.
- 114) 新野直明：高齢者の疾病 - 主として精神的 - . 老年学テキスト(柴田博他編), 建帛社, p 98-106, 2007.
- 115) 古谷野亘,柴田博,芳賀博他：生活満足度尺度の構造；因子構造の不変性.老年社会科学,12, p 102-116 , 1990.
- 116) 古谷野亘：老年期精神医学関連領域で用いられる測度 QOLなどを測定するための測度(2). 老年精神医学雑誌, 7(4), p 431-441, 1996.
- 117) 古谷野亘：生活満足度の構造；主観的幸福感の多次元性とその測定. 老年社会科学, p 99-115, 1989.
- 118) 山本嘉一郎,小野寺孝義：Amosによる共分散構造分析と解析事例. 第2版, ナカニシヤ出版, p 1-47, 2002.
- 119) 福川康之,小川まどか,長田久雄：ライフイベントとストレス. 老年学テキスト(柴田博,長田久雄,杉澤秀博編),建帛社, p 183-193, 2007.
- 120) 三澤久恵,野尻雅美：高齢者の生きることの意味の探求に関する研究 - スピリチュアリティ概念生成 - . 日本健康医学会雑誌, 16 ( 3), p 58-59, 2007.
- 121) 山口智子：高齢者の人生の語りにおける類型化の試み - 回想についての基礎的研究. 心理臨床学研究, 18(2), p 151-161, 2000.
- 122) ボブ・G・ナイト；長田久雄監訳：高齢者のための心理療法入門. 中央法規, 2002.
- 123) 棚次正和：人間の事柄としてのスピリチュアリティ. 宗教研究, 80(2), p 267-291, 2006.
- 124) 宮家準：生活の中の宗教. NHK ブックス 376,日本放送出版協会, 1980.
- 125) 浅井暢子：精神障害者に関する素人理論.日本社会精神医学会雑誌,14(1), p 67-77,2005.
- 126) Sternberg R.J：Implicit theories of intelligence, creativity, and wisdom. Journal of personality and social psychology, 49(3), p 607-627,1985.
- 127) Osterman,p: Presence:Four Ways of Being There. Nursing forum, 31(2), p 23-30, 1996.
- 128) Mayeroff Milton：On caring, perennial library, New York, 1972.
- 129) Taylor,H.J：Spiritual Care -Nursing Theory, Pesearch, and Practice-.New Jersey,Prentice Hall, 2002.
- 130) Georege LK：Subjective well-being ;Conceptual and methodological issues. Annual review of gerontology & geriatrics, 2 , p 345-382, 1981.
- 131) Mayeroff. M：On Caring. First Perennial Library Edition Published, New York, 1972.
- 132) 金井一重：ケアの原型論・序説 - イギリスにおける"近代ケア論"の生成過程とその理念. 総合看護, 4 , p 13-24, 1994.